

社会像5 環境にやさしい経済活動

目指すべき低炭素社会像

わたしたち一人ひとりが、地球温暖化問題と向き合い、ともに行動するための、共通の将来像

- 最先端の技術を誇る京都の環境産業が、省資源・省エネルギー、長寿命、リサイクルを前提とした製品やサービスの普及に先導的役割を果たし、環境と経済の好循環の下、活力ある地域づくりや世界全体の低炭素化に大きく貢献している。
- 企業では、エネルギー効率の高い機器の導入が進むとともに、環境面での社会貢献活動が活発に行われ、低炭素のまちを牽引する大きな力となっている。



市民、中小事業者の皆様の省エネ活動などにより削減した二酸化炭素排出量をクレジットとして認証し、市内で行われるイベントや特定事業者のカーボンオフセットに活用する、「DO YOU KYOTO?クレジット制度」を創設

「DO YOU KYOTO?クレジット制度」を活用した省エネで160トン削減（H22⇒H23年度）

平成22年度の主な取組



社会像6 ごみの減量

目指すべき低炭素社会像

わたしたち一人ひとりが、地球温暖化問題と向き合い、ともに行動するための、共通の将来像

- ごみを減らす生活や事業活動が社会システムとして構築され、それを前提とした製品が普及している。
- マイバッグの持参が当たり前になり、店頭で売られる商品の容器・包装材は必要最小限になるとともに、プラスチック製のものは激減している。



袋の中の新聞紙の文字が読める程度の透明（無色透明又は白色透明に限る。）で、市販の90リットルまでの丈夫な袋をお使いください。



黒い袋、青い袋、段ボール箱ではごみを出せません。

許可業者が収集するごみの袋を、透明袋に限定

市内焼却施設におけるプラスチック類の焼却量減少で19.3千トン削減（H22⇒H23年度）

平成22年度の主な取組

京都市の

資料1（別紙）

平成23年度版
（平成22年度実績）

地球温暖化対策

地球温暖化って？ ～地球の気温が上昇しています。

もし大気中に、熱を吸収する性質を持つ「温室効果ガス」がなければ、地球の気温はマイナス19℃くらいになるといわれています。人間や動植物が地球上で生きることができるのは、太陽光が、地球の大気を素通りして地面を暖め、その地表から放射される熱を温室効果ガスが吸収し大気を暖めているからです。

近年、産業活動が活発になり、二酸化炭素、メタン、さらにはフロン類などの温室効果ガスが大量に排出されて大気中の濃度が高まり、熱の吸収が増えた結果、気温が上昇し始めています。これが地球温暖化です。京都でも過去100年当たり2.04度の割合で気温が上昇しています。

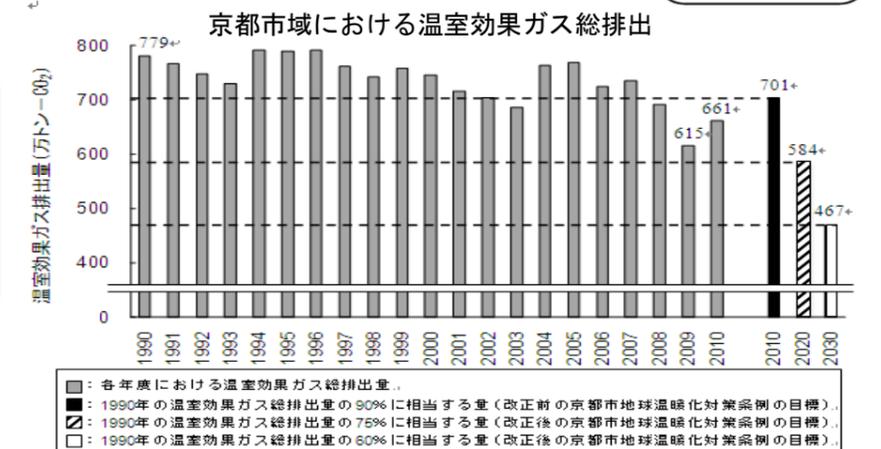
世界初の地球温暖化対策の国際的枠組「京都議定書」は京都で誕生しました。

1997（平成9）年、気候変動枠組条約第3回締約国会議（COP3）が京都で開催され、温室効果ガスの排出量を削減し大気中の濃度を一定水準に安定させることを目的とした、世界初の国際的枠組である「京都議定書」が採択されました。

京都市は2020年度までに25%、2030年度までに40%削減を目指します。

京都市は、「市域からの温室効果ガス排出量を、1990（平成2）年度比で、2030（平成42）年度までに40%削減、2020（平成32）年度までに25%削減」という高い目標の達成を目指します。

この目標を確実に達成するためには、私たち一人ひとりが地球温暖化という問題に向き合い、これまでのライフスタイルや社会経済の在り方を見直し、ともに「行動」を起こすことが必要です。そこで、京都市は、その「行動」の先に実現する持続可能な低炭素社会像を、市民や事業者の皆様と共感し、共有することが重要と考え、「京都市地球温暖化対策計画<2011～2020>」において、6つの2030年度の持続可能な低炭素社会像を提示しています。



次ページから社会像ごとの取組を紹介します！

社会像1 人と公共交通優先の歩いて楽しいまち

目指すべき低炭素社会像

わたしたち一人ひとりが、地球温暖化問題と向き合い、ともに行動するための、共通の将来像



- 使いやすい公共交通と歩く魅力にあふれ、人々が歩く暮らしを大切にする、人と公共交通優先の「歩くまち・京都」が実現している。
- 自動車利用の制限を含めた様々な抑制策を通じて、クルマの総交通量は減少し、走行しているクルマは、電気自動車をはじめとするエコカーに代わっている。

電気自動車とプラグインハイブリッド車の普及で50トン削減
(H20⇒H21年度)

平成22年度の主な取組



駅等のバリアフリー化推進



民間事業者と京都市が連携し、市内の主な電車・バスが乗り降り自由となる乗車券を作成



エコカーの普及

社会像2 森を再生し「木の文化」を大切にするまち

目指すべき低炭素社会像

わたしたち一人ひとりが、地球温暖化問題と向き合い、ともに行動するための、共通の将来像



森林の保全で45トン削減
(H20⇒H21年度)

地域産木質ペレットの利用で1千トン削減
(H20⇒H21年度)

- 市域の3/4を占める森を再生し、森に親しみ、森の恵みを都市に還元することにより、文化の醸成や産業の振興に積極的に取り組んでいる。
- 地域産木材を多様に活用しながら、京町家の知恵を生かした新たな住宅の建設が促進され、持続可能な木材利用の循環サイクルが構築されるとともに、京都らしい景観形成が進展している。
- 豊かな緑に囲まれ、人々が、暮らしの中で、身近に木のぬくもりを感じることができるまちが実現している。

平成22年度の主な取組



伝統的な京町家の知恵と現代的な技術を融合した京都型環境配慮住宅「平成の京町家」の普及促進

社会像3 エネルギー創出・地域循環のまち

目指すべき低炭素社会像

わたしたち一人ひとりが、地球温暖化問題と向き合い、ともに行動するための、共通の将来像

- 太陽光や太陽熱などを利用したクリーンなエネルギーの創出が市内あらゆる場所で盛んになり、ごみなどのバイオマスや河川などが、地域単位でのエネルギー源としての役割を果たしている。



太陽光発電で42トン削減
(H20⇒H21年度)

平成22年度の主な取組



住宅用太陽光発電設備の導入に対する補助



使用済み灯油からバイオディーゼル燃料を精製し、市バス、ごみ収集車に使用

社会像4 環境にやさしいライフスタイル

目指すべき低炭素社会像

わたしたち一人ひとりが、地球温暖化問題と向き合い、ともに行動するための、共通の将来像

省エネ法の基準を達成した住宅の普及で20トン削減
(H20⇒H21年度)



- 一人ひとりが、環境にやさしい取組を当たり前のこととして行い、自然と共生した地産地消の食文化や季節感を大切にする「ライフスタイルの京都モデル」が定着している。
- また、地域のつながりや家族のきずなを大切にするとともに、地域の創意工夫が生かされ、市民一人ひとりの身近な地域から「エコ」が発信されている。

平成22年度の主な取組



旬の時期を待って食する京の旬野菜の直売所設置



将来を担う子ども達が、エコライフを学び実践する「子どもエコライフチャレンジ推進事業」の実施

